文化 芸能

風韻

「会津の真実」書くのが宿命

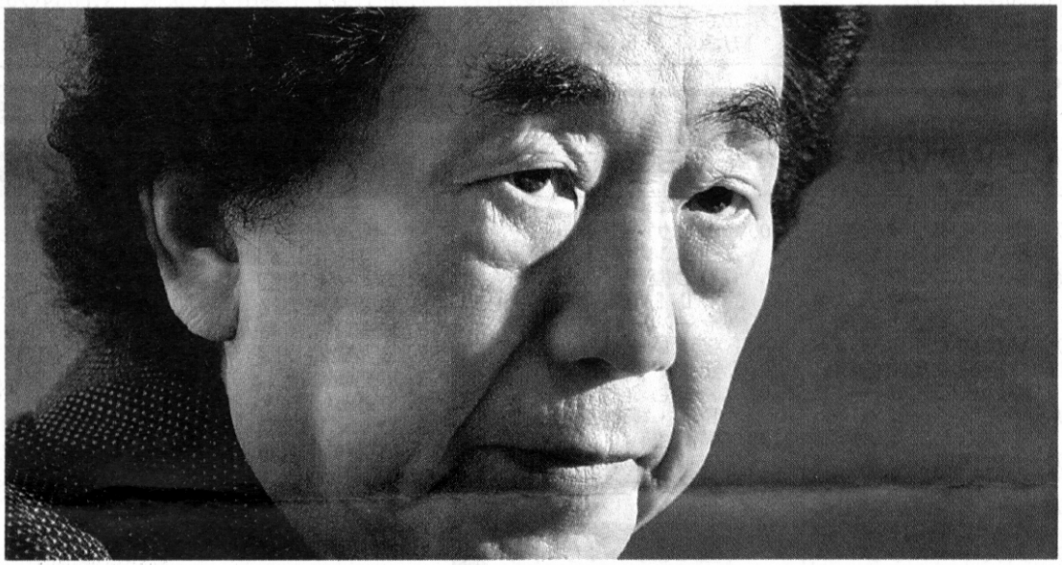
作家　早乙女　貢

一筋の作家生活は、50年を超えた。全21巻に及ぶ『正続　会津士魂』ほか歴史・時代小説の分野に名を刻んできた筆一本の半世紀。そろそろ振り返る時期では？　自伝の構想は？　と、即座に。

□　□

自分のことはいいの。今はとにかく、会津の続々編が焦眉の課題だ。ライフワークだもの。終わりは、ない。勝者の手で一方的に歪められた幕末維新・近代化の歴史を敗者の立場から検証する作業に、終わりはない。

曽祖父が戊辰戦争を闘ってます。そして敗れて会津は焦土と化した。祖父たちは焼け野が原になった故郷を離れざるを得なかった。のちに米国に留学して帰国後、今度は上海に渡った祖父は再び会津の地を踏んでいない。父親の生地は横浜。僕は中国で生まれてる。そういう一族の流転は会津人には珍しくない。帰るべき故郷を奪われたんだから。



東京・有楽町で＝金井三喜雄撮影

さおとめ・みつぐ　26年、中国・ハルビン市生まれ。『僑人の檻』『正続　会津士魂』『北条早雲』『由比正雪』ほか著書多数。

敗戦で青春の土地から日本に引き戻された僕もまた、故郷喪失感を抱いていた。どこにいってもエトランゼ（異邦人）、そんな気分だった。でも、デラシネ（根無し草）じゃない、根はまだ見ぬ会津にある、という思いはあった。親にとっても魂の拠だったんだね、僕は十分に会津の記憶をふきこまれていた。

ご先祖が戊辰戦争でなめた辛酸、怨みを。逆に、それは誇り高い物語でもあった。正義を貫こうとしてひどいめにあったんだ、と。そのことを人は知らない。明治政府が都合よく改竄した戊辰戦争の真実を書くことは、だから僕の宿命でもあった。

なぜ先輩作家が書かなかったのかをよく考えるんだけど、やはり、国家統制だね。昭和12年から日中戦争が始まった。そして大東亜戦争へ。統制はより厳しさを増す。昭和16、17年ごろから20年までのあいだの歴史小説は百％皇国史観。作家が体制のお先棒をかつぐ時代があった。

僕はね、ものを書く以外の仕事を考えたことがない。実際、やってません。挫折もあった。22歳の時、「暁闇」の題で青春彷徨を書いて総合雑誌の小説募集に応募。入選作なしの佳作第1席に入って結果は発表されたんだが作品の掲載以前に、雑誌がぽしゃった。

原稿は行方不明になったきり。泣くに泣けないよ。でも気を取り直して、書いて飯が食えるようになり始めたのが27歳ぐらいからかなあ。『僑人の檻』で直木賞をとったのが69年。そして「会津士魂」を書く機会が巡ってきた。

直木賞は天恵だったね。だって01年の21巻完結まで30年の長きを、月刊雑誌が連載の場を開いて支えてくれた。そんなこと直木賞もらってなかったら考えられないじゃない。だけど……、まだ続きがあるんだ。

だって、西南戦争がすんだところでとまってる。これから国会開設、磐梯山の噴火と色々あって、そして会津の人々がたちあがるんだから。復興への道を歩き出す、そこまでを見届けたい。書くよ。続々で僕が死ねばいいけど死ななかったら続々だ。僕の人生の目的は書くことだからね。スタンダールじゃないが、生きた、書いた、死んだ、それでいい。（インタビュー・河合真帆）